

學界消息

一九五七年國際地理學會議
の景況

昨年八月から九月にかけて、日本で國際地理學會議が開かれた。會議の大略を記載するとともに、二三の所感をしるしておきたい。

會議の性格

會議は日本學術會議と國際地理學連合 International Geographical Union (略稱 I G U) との共同主催であつて、會議の正式の名稱は I G U Regional Conference in Japan, 1957 というのであつた。地理學界では一昨五六年、リオデジャネイロで第九回 I G U 總會と第十八回國際地理學會議を開いたのであるが、これは大體四年に一回開かれるもので、その前は五二一年にワシントン、四五年にリスボン、三八年にアムステルダム、三四年にワルソー、三一年にパリ、二八年にケンブリッジ、二五年にカイロ、二四年にブラッセルで I G U が設立されて、第一回の總會を開いている。I G U のできない前は國際地理學會議 International Geographical Congress があつて、これは一八七一年のアントワープにまで溯ることができるといふ。

地理學にこのような國際交流が早くからあつたのは、一つは十九世紀には近代地理學は全く自然科学の分野に屬していたことが主因であると思う。というのは自然科学部門では早くから多く、このような國際會議をもち、あるいは日本でも明治時代から自然科学關係の雜誌には歐文の要旨をつけて、相互の論文を交換することなどが行われていた。(この點、人文科學・社會科學の諸分野とは少し異なる。) 地理學も當時、自然科学の一分野であつたから、國際地理學會議にも早くから加盟していたのである。人文地理、社會地理などの分野が芽生え、重視されるようになった今日の地理學においても、このような傳統によつて、國際會議のような交流が、組織として比較的容易に開かれ得るのはまことに幸なることであつた。

現在 I G U に加わつている國は四十八カ國(未加盟の大國は大陸の中國、東獨、南北朝鮮等)であるが、四年に一回の會議には、國外から五百ないし八百の地理學者が集まるので、開催地はおのずから大體、ヨーロッパと北米とに限られることになり、二五年のカイロと五六年のリオは例外である。それで四年に一回のコンGRESの間に、もう少し小規模な國際的會合(地域會議)をもつことになり、その第一回がアフリカのウガンダで五五年に開かれた。それはアフリカの地理學を推進することに主眼があつたので、アフリカ以外からは、内陸熱帯の專攻學者約二十人が参加した。會議の議題も地理學全般でなく、内陸熱帯アフリカの天然資源・食糧・人口に關することに限定された。

今回の日本の會議は、IGUの憲法からはアフリカの場合と同じくコンGRES中間の地域會議であるが、地理學者の數も多く(五二年にユネスコの援助で出版された World Directory of Geographers によると、世界の地理學者總數三五一七人の内、合衆國九三〇人、ドイツ五三四人、フランス二七七人、イギリス二四五人の次が日本で、一三九人で數の上からは世界第五位である)、まず近代地理學の業績のある國といえるので、會議のテーマはアフリカのごとく限定せず、五六年十一月に發送した回報には、次のように掲げた。

一、造山帯における地形の諸問題

二、氣候環境

三、應用地理の諸問題(土地分類、土地保全、災害等)

四、人口稠密地帯における都市と村落

五、戦後の地理上の諸變化

a 工業化、b 總合開發、c 土地利用

六、産業の地域構造

七、アジア諸地域の地理學的諸問題

けつきよく、地理學の全分野をおおい、どのようなテーマでも受け、どこかで討議するということにはしたのであり、参加者も報告内容も、アジア地域に限定することなく、全世界を対象としたコンGRESと同じものになった。(この利害得失は簡單にはいえない。対象地域やテーマをアジアに限定して、少數専門家の地域會議にした方が日本・外國ともにプラスすることが多かったかどうか。しかし日本の學界ならびに地理・國情の

紹介という意味では、コンGRES方式がより目的になつたとはいえるだろう。)

會議の日程

このような國際會議を、日本で開こうかということは、五五年の早春にはじめて話題に出たが、幾多の曲折の後、國內地理學界の意見もまとまり、閉議の決定をみたのは五六年の七月末日であった。爾來、會議の開催まで滿一年、諸般の準備をして、(一) 部會とシンポジウム(東京と天理で開く)、(二) 現地討議(前者の前後に行う)の二つからなる日程をもって、八月十九日から九月十三日まで開かれた。参加者、外國人、十九カ國八十餘人、日本人三百五十餘人であった。(外に登録料を拂って出席しなかつた外人數名、機關で登録した外國大學・研究所若干。)

部會

部會は合せて十二、閉會式の日を除いて他は三時間ずつ延三十三時間近く、前半は神田の學士會館、後半は天理大學で行われた。口頭發表者は外人二五、日本人四〇(提出論文八〇の内より)。發表時間は一入十五分で、討論はないものもあったが、十分から二十分位までとれた。

八月二十九日 1. 地形學、2. 總合開發産業の地域構造、3.

土地利用

八月三十日 1. 氣候學、2. 工業化、3. 地誌その他

九月二日 1. 地形學、2. 集落地理學、3. 土地利用、人口
 九月三日 1. 氣候學、2. 水理學、3. 地誌その他

提出された論文要旨(歐文四百語)は全部 Abstracts of Papers として會議に配布した。(その和譯文は日本地理學會機關誌、地理學評論九月號に載録したから詳細はついて見られない。)印象的な所見をいえば、日本側の提出論文は對象地域が比較的小さく、特定のテーマについて深く論じたものが多かったのに對し、外國側のものは廣い地域の一般的な議論が多かった。従つて、日本のものは短い時間に議論が進まず、外國人に理解が困難なものがあつたと思われる。これは今日の日本の地理學界の一つの傾向であつて、これが極端になると、單にその地域の微細詳密な研究となり、變動しつゝある日本や世界の事情と無關係に、切りはなして論ずるといふ缺陷も見のがされることになる。一つの村をみても、そこにその村特有の事情とともに、日本の姿、アジアの問題を讀みとるような視野の深さがなければならぬのであつて、それがなければ自分以外の他の人には了解がされにくいのである。

東南アジア・シンポジウム

第三日の八月三十一日午前は全部、一堂に會してシンポジウム「東南アジアの地理」を行った。これは六月によくやく決定したもので、十分の準備はできなかったが、東南アジアの地理を次の三點にしばつた。すなわち第一にその自然、そのなかでもっとも東南アジアを特徴づける「モンsoon」、第二にその

經濟生活、その特徴的なものとして「米作」、第三に政治的に獨立しても困難と矛盾の多い東南アジアの今後の課題としての「經濟開發」、以上の三つをとりあげることにして、外國の參加希望者のなから、それらの問題を專攻している學者に手紙で、一報的報告の原稿を依頼した。

當日はまず一般問題として、グルー(佛コレジドフランス。都合により不参加)、「東南アジアと熱帯」、飯塚浩二(東大)「東南アジアの地理的諸問題」を序論とし、第一はチャタジ(カルカッタ大學)「モンsoonとその生活に對する影響」、第二はドビー(マラヤ大學)「米作に關する問題」、第三は安藝一(東大)「東南アジア諸國の經濟開發」の報告があつた。一つの報告が終ると、それに關する各地各人の意見や討論が出た。しかしこれは時間と言葉の關係で、議論に花が咲くというところまで行かなかつたのは、かえすがえすも残念であつた。

會議の公用語は英佛語であつたが、質問討論は日本語も加えて、必要に応じて通譯をつけた方が、多少の時間はとつても議論は徹底したであらう。しかし部會やシンポジウムの運営で何人かの座長(全部、外國人をあて、書記に日本人をつけた)の司會ぶりは見事であつた。日本の研究發表集會における座長は、單なる呼び出し役、時間催促係のような役割しかもたない場合も見られるが、今回は各國の參加者があり相互に知らないもので、座長ははじめに發表者の業績等の紹介をし、終りには問題を整理して討議をうながす等、なかなか鮮やかであつたが目立つた。

特別講演と展示

特別講演は二つあった。八月二十九日の開會式(東大講堂)のときにはスタンブ教授(ロンドン大學)が「應用地理學の目的」について、世界の土地利用狀況が國により著しく異なることをあげ、世界的に土地利用調査の必要を説き、九月三日の開會式(天理大學講堂)にはクレッシー教授(シラキニス大學)が褐(砂漠)・綠(オアシス)・白(高山の雪)・黑(石油)と題して中東の地理を述べ、資源と世界の關係を解説した。兩者とも半公開的な講演であったから、平素専攻の土地利用と砂漠の話ではあったが、かなり一般向であつたことは止むを得ないであらう。

なお會場では展示が行われた。東京では現代地圖、天理では古地圖が系統的に展観された。とくに後者は天理大學、京都大學、南波氏、秋岡氏、水木氏らの所藏稀品が並べられ、おそらく日本で開かれた古地圖展のなかで一番豪華なものであつたであらう。

現地討議

地理學という學問の性質上、リーサーチ・エクスカーションは必須不可欠であるので、部會の前後に次の五班の現地討議をやって、記載の諸問題について見學し討議した。

1. 北海道 八月十九日—二十七日、東京から往復飛行機、道内一巡。屯田以來の開拓とその集落、寒地の米作、工鑛業、カ

ルデラ、泥炭地と火山灰地。

2. 東北 八月二十一日—二十八日、絹織物、總合開發と工業地帯(仙臺、鹽釜、北上、八戸、秋田)、松島の沈降海岸、十和田湖カルデラ、弘前のリンゴ園藝、城下町と民家。

3. 東海・東山 九月四日—十一日、志摩の海蝕臺地、沈降海岸地形、眞珠養殖、工場制手工業(岐阜提灯、織物、瀬戸もの)、近代工業(鐘紡、日本陶器、光學器械)、佐久間ダム、伊那谷の養蠶・製糸、段丘と盆地、甲州のブドウ園。(富士の五合目まで上る日程であつたが天候のため中止)

4. 山陽・九州 九月四日—十三日、大阪、六甲、岡山の干拓、廣島、北九州工業地帯、有田焼、雲仙・阿蘇、別府の溫泉利用と地質構造。

5. 四國・瀬戸内 九月四日—九日、大阪、六甲、香川平野、鹽田、琴平の門前町、新居濱の工業地帯、瀬戸内の島。

これらはおのおの外國人全員十ないし二十人が参加し、日本側は指導者三名、それに各地でその地域の地理學者が参加して、説明と討議と、少しの觀光をもかねて旅行した。半年餘、各地で周到に準備し、縣市その他各方面の援助を受けて、参加全員には大いに喜ばれ、日本紹介とともに討議の實をあげた。日本には地理の研究者が多くおり、かなり深い個々の研究があるので、外國で二、三の資料で日本のことはうかうか書けないというのが彼等の感想だった。

部會の會期中には、東京(巨大都市)、川崎(工業地帯)、大和盆地(條里集落、郊村、土地利用)、奈良市内(觀光)、宇

治・京都（茶園・西陣）の現地討議があり、これは日本人および外國人のほとんど全部が参加した。このほか會期前に、飛行機の都合で二三日の餘暇のあった外國人の希望者には、大學の學生が中心となつて、スクールバスで東京の近郊等、日歸りの見學旅行をした。

出版物

會期中、會員には前記、歐文要旨集のほか、プログラム、参加者リスト、特別講演要旨その他を配布したが、現地討議のガイドブック七冊（北海道、東北、中部、近畿、中國九州、四國瀬戸内、日本の地理）合計B6判約八百頁を刊行して配布した。これは時間の餘裕もなく、内容にも英文にもミスが多い

が、將來これを補足すれば、よい日本地理書となつて、外國人には多少の役に立つであろう。

このほか東京都圏建設部では「東京の地理と計畫」（變A5判一二〇頁）を刊行し、その他の機關でも紹介の印刷物を作つたところもある。

會議の正式の報告書であるプロシードンクスは、英文B5判約六〇〇頁のものが三月末までに完成する豫定である。また會議の模様を伝えるものには、學術月報（日本學術振興會）十一月號に、地理學評論（日本地理學會）一月または二月號にもやや詳細な記録が残されるはずである。（五七・一〇・二〇）

（一橋大學教授 石田龍次郎）